

## 立ちどまる

守 永 英 子

“立ちどまる”という言葉から、心に浮かぶ日常生活の中での状況を考えてみると、「どの道を行ったらよいのだろうか」と迷う時、「今まで来た道でよかったのだろうか」と疑問をいだく時、あるいは、路傍の石や花、周囲の風景、事柄などに心を動かされる時などが思い起こされる。大ざっぱにいいかえてみれば、一は“これからのこと”についての迷いであり、二は“今までのこと”についての疑問であり、三は“今までと違うものが見えてくる”あるいは“今までと違うように見えてくる”ということになるであろうか。それは、立ちどまる主体の側から考えれば、“もう少し考えたい”“もっとよく見たい”ということであろうか。こう考えてみると、私の心は、大変しばしば立ちどまりたい状態に置かれているといえる。

ところで、私は現場の保育者、保育の間は、自分のリ

ズムで生活することはできない。絶えず、大勢の子ども  
の動きに対応して動かなければならないから、勝手に立  
ちどまることは、なかなか許されることではない。一般  
に、“よい保育者”のイメージは、子どもの中に溶けこ  
んで、まめまめしく動きまわる姿にあるとされているよ  
うに思う。

しかし、時には、あえて立ちどまって、みることに、何  
と新鮮で、有効なことか……。

毎日、砂場にプールのように水をためてしまう五歳児  
の砂場あそびに、この子どもたちのこの遊びは、一体ど  
うしたものであらうと思案したのは、つい昨年のことであ  
った。ある研究会で、水で遊ぶ子どもたちの話が出て、各  
自が考えてくることになっていたある日、たまたま実習  
生の手があつたのを機会に、ほんの数分ではあつたが、  
砂場で遊んでいる五歳児を眺める機会をもった。まさに

私の憧れる「保育の中で立ちどまった一時」である。

数人の子どもは、砂場の水道の蛇口に、直径四・五センチのビニール管をあてがい、はずれないように、管の下に積木をあてて、水を出していた。一人が、管の口をてのひらでおさえてからパッと離れた。「〇〇万ボルトだ」と彼はうれしそうに叫んだ。てのひら一杯に、水のほとぼしり出る力を感じたのだ。

また、別の子どもが、管から流れ出る水をふるいで受けた。水は、ふるいの目を通して、細かくなって落ちた。「雨だ！」

今度は、器から水を移して空の容器に水を満たした。ふるいに砂利を入れて水をかけ、また水に浸して、砂利をきれいにした。それから管の口をおさえ、ややすき間をあけて、てのひらと管の間から水が勢よく四方に散るのを眺めた。

初めはしみ込んでいた水が、砂場にそろそろたまりはじめ、その水がきたなく泡立ち始めた。他の子どもが、その泡だけをすくって器に集める。たまった水を、レーキで押すと、押されるままに水は動いた。

管の口から流れ出る水の落ちるところに、積木を置

く。水は積木にぶつかって、四方に散る。積木の代りに自分の足を出してみる。水は、今度は、足にぶつかって散る。散るのを見るだけでなく、今度は、流れ出て散る水の力を、足に感じる。

こうして、子どもたちの働きかけに応じて、水は、その特質のいろいろな側面を見せてくれる。なるほど、これでは、砂場は間もなくプールになるわけである。

この時、もし立ちどまることがなかったら、子どもと水の、これほど豊かな出会いを、私は見ることができなかったに違いない。

一例をあげて、時に立ちどまってみることの効能を云云するのは性急であらうか。この拙文が掲載されるのは、八月号のはずである。いつもひたむきに教育の道を走っている真面目な教師族にとっては、まさに、立ちどまるに最適な月である。思い切って、立ちどまってみるものである。そして、視野をひろげて、自分の目で見つくりと見、自分の心でじっくりと感じてみたいものと思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)